よみがえれ！総合的な学習の時間

八王子市立東浅川小学校４年担任　藤井敏晴
e-mail アドレス　toto_21@ka2.so-net.ne.jp

１．始めに

平成１０年１２月の指導要領において「総合的な学習の時間」が記述され、試行を経て、１４年４月に本格スタートした。従来の教育課程の考え方、在り方を大きく変えていく一歩が踏み出された。生活科を含めれば二歩目かもしれません。かつて、「合科教育」「統合教育」などとして、試みられてきていたものを、学びの方法と知の編成について考え方を大きく転換していこうという流れがここで決定的になってきた、と言えよう。しかしながら、その後の経過はどうであろうか。迷走する文科省、「基礎学力」論に後押しされて、学びと知を一世代前に押し返そうとする諸勢力、マスコミの面々。忸怩たる思いを抱きながら表題のテーマを掲げてみた。

２．「総合的な学習の時間」を取り巻く論調

平成９年の教課審中間答申および翌年の最終答申には、総合的な学習の時間の創設についての趣旨が、中核的な位置に位置づけられている。そして当時の論調を紹介すると。

村川雅弘（鳴門教育大学助教授　平成１０年当時）は「総合的な学習の時間の構想」（明治図書）で「教育課程審議会最終答申は(総合的な学習の時間設置の目的について）自ら学び自ら考える力など生きる力を全人的な力であることと踏まえ、教科等の枠を越えた横断的・総合的な学習をより円滑に実施するための時間を確保することと述べ「生きる力を育むことを目指す教育改革においてきわめて重要な役割を担うとの考え方を貫いている。」とした。またこの明治図書の雑誌で、教育課程審議会「総合的な学習の時間」分科審議会主査でもあった山極隆(富山大学教授　当時）は「総合的な学習の時間で生きる力の育成を」という一文を載せている。そして、小林宏巳(東京学芸大学教授)も同雑誌で「「自ら」を繰り返さざるを得ないのはなにか・・この当たり前のことが繰り返し協調されると言うことは、実態としての子どもの学びがよほど自主的・主体的行われていないという判断がなされているからであろう。」とも述べている。

しかしながら、この雲行きは平成１４年頃から少しおかしくなってきた。

かつて子ども達が受験に追われているころには、「詰め込み教育批判」をしていたマスコミは、空気の流れに没主体的に動き始める。つまり、マスコミと、一部教育評論家と世の中的には一部の教育ママ的な意見(一部 P 連)と、各教科のセクト主義に構造的にとらわれていた、専門教科中心主義の研究者や、塾産業界や私立学校業界が口を揃えて「学力が心配」を合唱するようになってきた。そして、もともと新しい教育の取り組みや、手間暇のかかるものには必ず斜めに構える一部の教師達はこぞってこれらの勢力の陰に隠れ始めた。

和田秀樹（精神科医）は平成１４年の新聞で「受験競争の激しかった６０年代、７０年代のほうが今より犯罪が少なかった」「学力と言えばやはり学んで得られた結果、学業成績だ」「最低限、国際的なレベルでの学力を我が子に保証してあげるのは親の仕事」などと言っている。同年４月に、小、中、私学、塾関係者の座談会の取材では、中関係者が「国は何も予算や人の手当をしていない。現場の教員の粉骨砕身の努力だけに総合学習の正否がゆだねられている。」としている。又、東京大学教授の苅谷剛彦は「「自分から」優先の限界」ということを平成１５年１月の読売の「教育フアイル」で主張している。そして拓殖大学客員教授の石井昌浩は平成１７年６月の新聞で「大人は、子供の発達段階に応じて教えることをきちんと教えなければならない」とする。

３．学校では・・・

いわゆる移行措置の時期(平成１１年度から平成１３年度のころ)　は、各地教委段階の研修で、「先生方は、自信持って創意あふれる単元づくりをやってください。学校、学年でどう取り組むかが問題です。先生方の数ほど新しい単元があって良いと思います。」こんな指導がなされたものです。

ところが、平成１４年の新指導要領完全実施以後徐々に様子が変わってきました。口述。

（平成１７年度の東浅川小学校３年生の総合的な学習の時間）

「総合的な学習の時間」を取り巻く周囲の様子が徐々に変わっては来ましたが、昨年同時に着任した併行学年の担任と、ある程度思うとおりに取り組むことができました。(人的資源、経済的資源を除いて)

以下の表にまとめたものが、３年生の総合的な学習の時間の１０５時間の大体である。

東浅川小学校３年生　平成１７年度の総合的な学習の時間

１学期	２学期	３学期
６月 地域探検に出かけよう・ 陵南公園の第１次探検 課題探し ５月から７月～８月　・ ポップコーンを育てて収穫祭を開こう 育てる　記録する 課題を持つ １学期 デジカメを使おう パソコンに慣れる 10 時	９月 地域探検に出かけよう計 30 時 陵南公園の第２次探検 課題解決学習へ　PC でのまとめ ９月～１０月 収穫する　招待状（ｐｃ） 収穫祭(発表会　調理) 計 30 時 １０月～１１月 「いちょう祭り」への参加 しおりの販売　介助犬育成協会へのボランテイア寄付 環境問題の紙芝居作成とお店での発表　　１２月～３月 10 時　　「ボランテイア　・ ってなに？」	２月 地域のお年寄りから学ぼう 昔遊びを教わって・ 15 時 個別の課題　10 時 全体での発表会

ポップコーン収穫祭への準備
家庭科室で調理してみた。

八王子市いちょう祭りへの参加
１１月１９日熊野神社

５．３年生にとっての「総合的な学習の時間」

昨年の校内研は「道徳」であった。どの授業にであっても、はじめに必要な分析は、子ども達の実態である。４月、教師達は東浅川小学校の子ども達について、今必要なこと、伸びてもらいたい「力」は「自分からすすんで学習する力、周りのことに気付く力、自分の思いを正確に伝える力」ではないかと結論を持った。

３年生の学年経営もここから出発し、「総合的な学習の時間」の取り組みを力強く進めるきっかけともなった。

変様してきた子ども達。

２学期後半　いちょう祭りで、「自ら動く」ことに興味を持ちだした子ども達。

社会科の「スーパー」の見学では、教室での事前の学習以上に働いた「グループ活動」。これは担任のただの希望的な「観察」「思い」だけではないはず。

６．「総合的な学習の時間」の「学力度」を計りたい

そこで私は、新聞・マスコミなどが「総合的な学習の時間」について取り上げたときによく耳にした、「総合的な学習の時間は良いのだが、実際にどんな力が付いているのか分からない」とか「うちの子どもは総合って言っても、毎週図書室で本を読んでいるだけらしい」の批判について、なにか目に見える形で、具体的なものを提示していきたい、と常々考えてきていた。

総合的な学習の時間を実施していく上で、子ども達にとってどのような力が必要か考えてみた。又、その「必要な力」そのものが、「総合的な学習の時間」の実施によって培われていくものであることも見えてきた。私は以下のアンケートによる調査を「総合的な学習の時間」の「学力度」の調査と位置づけてみた。

その「アンケート」は以下のものである。

アンケートは、自分の今の様子に合うものを自由に選びなさい、無記名で良いです、と行った。

学習の、気づき・計画・方法などの質問です　右に　○を入れて下さい。

番号	内容	たいへんよい	少しよい	ふつう	できない	ぜんぜんできない
Ⅰ	○ まわりのことによく気がつく ○ いろいろなちがいによく気づく ○ 直すところがすぐ分かる					
Ⅱ	○ 直すところや、やってみたいことがよく見つかる。 ○ たくさんあるやってみたいことのなかで、大事なことや、そうでないことの区別ができる。					
Ⅲ	○ やってみたいことがあったとき、どんなことをすればそれができるか、考えるのがとくいである。					
Ⅳ	○ 一つのやり方がだめでも、別のやり方を考えることができる。 ○ やりかたがないときは、自分でやり方を作ったりする。					
Ⅴ	○ 自分の見つけたこと、やったこと、かいけつしたことを、人にせつめいしたり、ぜんたいに発表したりするのがとくいである。					

７．アンケートの方法と分析

このアンケートは、まず学級の児童を対象にして、９月と３月に実施した。そしてほぼ同時期、保護者にも同じ内容のものをお願いした。児童、保護者双方の角度から、「総合的な学習の時間」の児童の「学習度」について測ろうとした。集計は、単純な「点数」にした。９月と３月で標本数(保護者)も変わるので、標本数で除する「平均値」を求めることにした。結果は以下通りでなかなか興味深い結果となった。

小数第３位以下切り捨て

	平成１７年９月実施アンケート			平成１８年３月実施アンケート		
	項	素点 ／標本数	平均点	項	素点／標本数	平均点
保護者	Ⅰ	１０８／３１	３．４８	Ⅰ	７９／２３	Ø ３．４３
	Ⅱ	９７／３１	３．１２	Ⅱ	７５／２３	Æ ３．２６
	Ⅲ	１０１／３１	３．２５	Ⅲ	８９／２３	Æ ３．８６
	Ⅳ	９４／３１	３．０３	Ⅳ	７８／２３	Æ ３．３９
	Ⅴ	９４／３１	３．０３	Ⅴ	７５／２３	Æ ３．２６
児童	Ⅰ	１０７／３５	３，０５	Ⅰ	１１７／３５	Æ ３．３４
	Ⅱ	１１６／３５	３．３１	Ⅱ	１３３／３５	Æ ３．８０
	Ⅲ	１２３／３５	３．５１	Ⅲ	１２９／３５	Æ ３／６８
	Ⅳ	９９／３５	２．８２	Ⅳ	１５０／３５	Æ ４．２８
	Ⅴ	８３／３５	２．３７	Ⅴ	９０／３５	Æ ２．５７

質問項目の意味内容対比

Ⅰ＝認知　Ⅱ＝識別　Ⅲ＝方法の思考　Ⅳ＝試行の継続　Ⅴ＝伝える

全然できないを１点、できないを２点、普通を３点、良くできるを４点、大変良くできる、を５点として集約した。９月と半年後を比較すると、「保護者アンケート」の「Ⅰ」の項目だけが、微妙に後退しただけで、あとはきれいに前進している。児童の自覚、保護者の目ともに学習力の進展をとらえている、といったら過言であろうか。

７．これからの課題

なんとなく肌で感じていたことが、はっきり数字となって出てきたことに少し驚いている。これからはもっと基礎の数値を増やしたい。平成１７年度は、３年１組だけのアンケートの実施だったが、平成１８年度は、学年全部の、ふたクラスに広げることができた。(一部実施済み　６月現在)　アンケート内容の吟味、標本数の拡大、他教科との関連など、追求する課題は、まだまだこれから大いにあると言えそうである。実績を積んで、「総合的な学習の時間」のより着実な定着の道筋を見つけていきたい。